

■市大文学研究科の最新研究紹介

●宗教的寛容と近代一多宗教帝国オスマンとアルメニア人キリスト教徒

上野 雅由樹 講師 (東洋史学専修)

●グリム童話の謎を探る第一 69 話『ヨリンデとヨリンゲル』とユング=シュテリングの信仰

長谷川 健一 講師 (ドイツ語フランス語圏言語文化学専修)

●地理学の新しい可能性—位置情報の可視化と空間分析

木村 義成 准教授 (地理学専修)

■シンポジウムI

「文学部は役に立たない」のか?

2015 年 6 月、文部科学省は国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて通知し、人文社会科学系学部、大学院の組織改編を求めたことが広く反響を呼びました。大学での教育研究に「役立つこと」を求める趨勢は強く、特に文学部は「社会に役に立たない学部」の象徴となっています。本シンポジウムはこの「文学部不要論」ともいえる議論を検証するとともに、現在の日本社会における「文学部」の存在意義について、大学の内外の視点から検証します。パネリスト

小林 哲夫 氏 (教育ジャーナリスト、朝日新聞出版『大学ランキング』編集長)

オバタカズユキ 氏 (ライター、編集者、『大学図鑑』シリーズ監修)

海老根 剛 准教授 (ドイツ文化研究)

司会

増田 聡 准教授 (音楽学)

■シンポジウムII

生涯学習時代とリベラルアーツ

公立大学は、地域社会の発展のためにどのような機能を果たすべきでしょうか。少子高齢化社会を迎え、生涯学習の重要性はますます増しつつあります。本シンポジウムでは、リベラルアーツの重要性とも関連させて、大阪市立大学文学部が担うべき役割について考えます。パネリスト

左子 真由美 氏 (株式会社竹林館代表取締役社長)

立花 健 氏 (後期博士課程 (社会人院生), 西洋史学)

森 久佳 准教授 (教育学)

司会

小田中 章浩 教授・文学研究科長 (演劇学, 表象文化論)

■研究科プロジェクト

人間社会に笑いが存在する理由

古代ギリシャの哲学者アリストテレスはかつて、「人間とはボリスの動物である」と述べました。しかし彼はこの言葉に代えて、「人間とは笑う動物である」と定義することもできたでしょう。事実、笑いは人間社会をうつす鏡といっても過言ではありません。こうした問題意識のもと、本プロジェクトでは、ユーモアに関する学際的研究を通じて人間本性の解明を試みています。

●心理学とユーモアの価値

小原 激斗 (心理学・前期博士課程 2 回生)

●自己卑下提示による「笑かし」

新居 佳子 (UCRC 研究員)

●ユーモアはなぜ哲学の問題になるのか

佐金 武 (哲学・講師)

●「絶対に笑ってはいけない」を考える

高野 保男 (哲学・前期博士課程 2 回生)

●カーニヴァル (祝祭) の笑い

大畑 浩志 (哲学・前期博士課程 2 回生)

■哲学

哲学道場: 哲学教室の深い話

哲学はギモンからはじまります。すでに確立された個別学問からとりこぼされたギモン、その外部にあるギモン、あまりにも素朴すぎてどう扱えばよいか分からないようなギモン。どんなギモンでも、それが有意味に理解される限り、哲学なら考えることができます。本ブースでは、参加者主体の哲学カフェ形式で、ゲーム的要素も取り入れながら、哲学のアクティブ・ラーニングを展開します。出入り自由! 専門知識不要!

ファシリテーター: 今井 早苗 (M1)、大畑 浩志 (M2)、佐金 武 (講師)、高野 保男 (M2)

■日本史学

若手3研究者の発表内容紹介

●集落遺跡にみる古代の日本

道上 祥武 (後期博士課程 2 回生, 日本学術振興会特別研究員 DC)

古墳時代から飛鳥・奈良時代の畿内地域をフィールドとして、当時の人々の居住痕跡である集落遺跡を取り上げる。集落遺跡の消長、分布、構造などから人々の生活を復元することで、日本古代社会の特質について論じる。

●中世都市・宇治と茶商人

徳満 悠 (後期博士課程 3 回生, 日本学術振興会特別研究員 DC) 京都近郊に位置する都市・宇治を取り上げ、戦国時代末期から江戸時代初期にかけての領主支配・商業・都市共同体などの変容を探る。宇治の特産品である茶とそれを扱う商人の活動に焦点を当て、課題へのアプローチを試みる。

●近世後期大坂における砂糖の流通

北野 智也 (後期博士課程 3 回生, 日本学術振興会特別研究員 DC)

江戸時代には嗜好品であった砂糖が大坂でどのように流通したのかを、取引の担い手であった商人のあり方と幕府による施策との関係から論じる。

■世界史学 (東洋史学 / 西洋史学)

史料をオリジナルで読む

歴史研究は史料を正確に深く読むことから出発します。そのため世界各地・各時代の歴史研究を行っている世界史学では、さまざまな言語で書かれた史料を読み解く必要があります。世界史学ブースでは 4 名の報告者にそれぞれの専門領域のオリジナル史料を解読してもらい、参加者に歴史研究の現場を体験していただきます。

●中世末期イタリアの遍歴説教—無名フランシスコ会士の日誌 (ラテン語)

木村 容子

●貨幣史料からみるビザンツ帝国史 (ギリシア語)

村田 光司

●ヴァルド派「異端」文書を読む (古プロヴァンス語)

有田 豊

●書院記と手紙を通じてみる宋代書院 (漢文)

金 甲鉉

■心理学

PC を使用した心理学実験の実演

社会心理学・認知心理学・行動分析学から、それぞれ計

3 種の心理学実験を若手研究者が実演します。

●虚記憶と推論 (認知心理学)

西 優里 (後期博士課程 2 回生)

見ていないものを見たとする虚記憶が、どのような推論の結果生ずるのか簡単に説明をし、DMR パラダイムという手法を用いて、心理学実験を実演する。

●遅延割引 (行動分析学)

中村 敏 (後期博士課程 1 回生)

待つことによって報酬の主観的価値が低下する「遅延割引」という現象を、質問紙による測定を通して実演する。

●潜在的自尊心と精神的健康 (社会心理学)

田端 拓哉 (UCRC 研究員)

意識化されることなく人が自分に対して抱いている評価的感情を潜在的自尊心という。このような潜在的自尊心を実際に測定し、これが精神的健康とどのように関係しているかを解説する。

■中国語中国文学

中国大陸酷児 / クエア映画について

謝川子 (前期博士課程 2 回生)

1990 年代以後、西洋のクエア理論に影響された中国各界の揺れにおける中国大陸酷児 / クエア映画についての紹介である。中国大陸酷児 / クエア映画が現れた背景、映画に関わる活躍人物及び彼らの作品、中国大陸酷児 / クエア映画は中国同性愛者解放運動との繋がりなど多くの方面から紹介させていただきたい。

■英語英米文学

文学と言語学の融合

「文学と言語学の融合」をテーマに、文学作品をどのように楽しめるかを認知科学の視点から紹介していきます。特に着目する点は物語の視覚化で、物語を読む際、我々がどのように状況を頭の中に描くかを解説していきます。発表は講義や講演というよりは、皆さんに参加してもらおうフリートーク形式をとりますので、皆様のご参加を期待しております。

■ドイツ語フランス語圏言語文化学

「学び」の瞬間発見—フランス語初級クラスの相互行為分析から—

大山 大樹 (後期博士課程 3 回生)

わたしたちは、フランス語の授業におけるグループワークを記録した動画をきめこまかく分析することで、学習者たちが実際に「学ぶ」瞬間を明らかにしました。さらに、その分析結果を外国語の授業に活かす方法を考案しました。このワークショップでは、その動画分析の実際と、そこから得られた知見をもとづく斬新な授業について報告します。

ポカロによるフランス語教材体験

溝口 大将 (4 回生)

「初音ミク」に代表される日本の「ボーカロイド」に触発され、フランスでも、人工合成音声で歌わせることのできるシンセサイザー型ソフト「Alys」が開発されました。Voxwave 社によるこのソフトは、フランス語と日本語を発声することができます。わたしたちは、このソフトと、Alys というキャラクターをもちいて、あたらしいフランス語の発音を学ぶ方法を考案しました。このワークショップでは、その方法について報告し、実演してみせます。

■言語応用学

中間言語から見る日本語学習者の文産出のメカニズム

楊 欽雯 (前期博士課程 1 回生)

中間言語から見る日本語学習者の文産出のメカニズムに関する発表を行います。中間言語とは、外国語の学習者がある言語を学んでゆく過程で生み出す特徴的な言語で、20 世紀後半から活発に研究がなされてきています。本発表では、これまでの先行研究とは異なり、英語母語話者と中国語母語話者による日本語学習の対照分析を中心に説明します。

